

HOF 01-053

本田財団レポートNo.53

「中国人とどのようにおつきあいすべきか」

—ゆれ動く中国と日中関係—

東京外国語大学教授 中 鳴 嶺 雄

講師略歴

中嶋嶺雄（なかじま みねお）

昭和11年 松本に生まれる。

昭和35年 東京外国語大学中国科を卒業。

昭和40年 東京大学大学院国際関係論課程を修了。

現在 東京外国語大学教授、社会学博士

この間、外務省特別研究員(在香港)、

オーストラリア国立大学客員教授、

パリ政治学院客員教授などを歴任

専攻 国際関係論、現代中国学、アジア地域研究

著書 「現代中国論」(青木書店)、「中国文化大革命」(弘文堂)

「中国をみつめて」(文芸春秋)、「逆説のアジア」(北洋社)

「日本外交の選択」(東経選書)、「中ソ対立と現代」(中央公論社)

「北京烈烈(上・下)」(筑摩書房)：サントリー学芸賞受賞

「中国 歴史・社会・国際関係」(中公新書)、「香港移りゆく都市国家」(時事通信社)

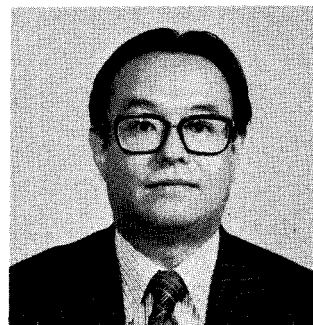
「日本人と中国人 ここが大違い」(文芸春秋、ネスコ・ブックス)

はじめ多くの著訳書がある。

このレポートは昭和61年8月26日、パレスホテルにおいて行われた第45回本田財団懇談会の講演の要旨をまとめたものです。

はじめに

こんにちは。私、いつも本田顧問、下田理事長、本田財団の皆様には大変お世話になっておりますが、この度、財団では中国で初めてセミナーを開かれるということですが、そのテーマが大変魅力的で、まさに今の中国が必要とする近代化の最も基礎的な部門に貢献されると思います。こういう日中関係のあり方が一番重要だろうと思いますが、この2～3年どうも日本人



は少しせっかちでして、中国と商売をやって、うまく儲かるのではないかという雰囲気、多方面に出ておりました。私が従来から申し上げている通り、中国人というのは商才にかけては世界に冠たるものですから、その中国人と商売をやって日本人が儲けようなんて事を考えること自体が、そもそも間違いの元ではないかという気がするわけです。

そんな様な事を考えながら、先程、御紹介いただきました本(「日本人と中国人—ここが大違い」)も書いたわけです。

そこで、中国を理解する上で、日本人と中国人との色々な違いを知るべきなのですが、そこには固有の民族的な違いだけではなくて、いわば社会的、政治的とでも言う違いが依然として尾を引いているわけですから、この2つの違いを良くつかんでおいていただきたいのです。そこで今日は、この2つの柱を縦軸と横軸にしてお話してみたいと思います。

中国と日本・その社会的経済的違い

○GNP

社会的、政治的あるいは経済的と言ってもいいのですが、この違いを取ってみますと、経済の上では日本人と中国人の間には一人あたりのGNP、つまり一人あたりの豊かさに於いて依然として40：1の開きがあり、40倍も日本人が中国人より豊かになっています。この前提は忘れるわけにはいきません。そしてまた、中国は今、一生懸命近代化の努力をしているのですが、あと十数年たちまして今世紀末になりますと、この格差はもっと開くという事です。予想される今世紀末の中国の1人あたりGNPは、すべてが順調にあって\$1000なのです。ですから今の日本のGNPの約1/10ですが、最近はその\$1000も中々そう簡単ではないという事から、鄧小平さんあたりは\$700～800位と言っているわけです。そんな控え目な目標なのにその達成がなぜ難しいかというと、1つには人口問題があります。今の人口をこのまま押さえることができれば、かなり目標へも到達しやすいと思いますが、はたして中国が人口をこれ以上増やさないという事ができるかどうか、これはまだ達成されたことのない歴史の実験であります。

これまでの例からすると、昔は「支那に四億の民がいる…」と、言われたのが今では倍以上の10億を越えているわけですから、10億になった人口がひよっとすると15億から20億になりはしないかという人口増加圧力が多大にありますので、これをどうす

るかというのが一つの大きな問題だと思います。もしも、今の“人口抑制政策、が難しくなれば、たちどころに1人あたりのGNPの達成率も低くなってしまいます。

○人口抑制

“人口抑制、と一口に言いますが、現在中国ではどういう事が行なわれているか、その内容はあまり知らされていません。とにかく子供がいると、1人っ子証明というものをとらなくてははいけません。なぜならこの1人っ子であるという証明がないと、あらゆる社会福祉の恩恵を受けられませんから。

ところが、最近中国では全中国社会が1人っ子でいいのかという議論があり、また子供の数を党や国家が決めるのは人権抑圧ではないのかという議論もありますし、人口抑制策が段々崩れつつあります。今、例外的にどういう時だけ第二子を認めるかという、第一子が身障者であった場合、その場合はもう1人子供を作っても良いという事が色々な手続きによって認められる事があります。それからもう一つは、たとえば中国の場合、夫婦でもなかなか同じ職場で同じ家庭に住めない事がありますから一私の所へ天津から来ている留学生も奥さんは四川省にいるそうです—そういう様な事もあり、色々な事情から子供がなかなかできない場合、1人っ子が平均的ですから貰い子をするという事が許されているわけです。ところが、貰い子をしたけれども、ひよんな拍子でまあ、お稲荷様に授けられて自分達の子供を懐妊した場合、生むべきか生まざるべきか、これは大変な問題なのです。そういう場合に、色々手続きを経て例外措置が認められるという様な事がありますが、そういう例外を認めてゆきますと、もうすでに10億を越えている人口がさらに増えていくのではないかという気がします。

歴史のロマンと現実の中国

中国という国は、どこへ行っても人が多いのですが大体日本列島の面積の3.7倍ぐらいしか実際に人間の住める空間はないのです。そこに10倍以上の人がいるわけですから、中国社会はどこの断面をとっても人、人、人で、人が犇めきあい蠢めきあっているというのが現実です。この現実は、言ってみれば毛沢東政治の高いつけだと思ふのです。今や毛沢東政治を否定し“毛沢東語録、を読む人はほとんどなくなりましたが、ここまで人口が増えてしまったというのは、結局、毛沢東が「人間は多ければ多いほど良い」という理論をかざして四半世紀も統治してきたことが生み残した現実で、これは五年や十年で解消できるものではない。おそらく21世紀までこのつけが残るだろうと思います。

こういう事を考えると、やはり中国は厳しい社会である事を忘れるわけにはゆかないのですが、この厳しさというものを我々はしばしば忘れてしまいます。中国へ行きますとやはり風光明媚な万里の長城へ行ったり、シルク・ロードをのぞいたりして日本人は悠久のロマンの中に浸ることができるわけですが、考えてみるとそれは紀元前の話であったり、11~12世紀の話であって、現実の中国社会が持っているさまざまな矛盾や困難というものは本当は関係ない歴史の文物なのです。

その中で日本がロマンティックに中国を感じすぎるものですから、そういう状況の中で生み出されるイメージと厳しい現実との間のギャップが、しばしば起こる様な気が致します。

毛沢東政治と文化大革命

そこで毛沢東政治なのですが、今、中国はこれを完全に否定していますが、20年歴史を戻して見ていただきたいと思います。私、丁度20年前の今頃中国へ行きましたが、文化大革命で大変な、まさに紅紅烈烈たる状況にあったわけです。どこへ行っても、「毛沢東語録」をかざした熱狂的な毛沢東崇拜の紅衛兵達が強烈な自己運動を展開しておりました。

私は色々の写真をとって来て、随分、Newsweekやアサヒグラフのグラビアにも載りましたが、所詮「音」を取って来ないと中国の文革の世界っていうのは分らない。テープレコーダーを持って行って録音しなければならないほど、国中がまさに喧騒の中にありました。

そういう状況の中で「文化大革命」をみんな礼讃していましたが、これはもう大変な事で党内闘争がこういう一般の紅衛兵、子供達まで巻き込んで展開されているのではないかという雰囲気非常に違和感を感じたわけです。それでその頃から、文化大革命は権力闘争であるという事を言ってきたわけですが、考えてみると毛沢東は、そういう権力闘争を大衆運動化するというユニークな政治技術を持っていたと思います。

50年代後半の「大躍進」政策もそうだったのですが、その極限的な状況が文化大革命だったと思うのです。そして「毛沢東思想」で全中国社会を埋め尽くそうとした所に無理があったと考えられます。もともと中国社会というのは非常に隙間の多い社会で、あちこちに空気が抜けるような所があり、いわば一種の潜在的な柔構造社会だと私は思います。

それを全部「毛沢東思想」で埋め尽くそうとしたのですから、これはやっぱり中国の歴史や伝統に逆らったと言わざるをえません。その結果、毛沢東ほどの人も結局は中国社会から撥ね付けられたわけです。で、それを私は隙間社会と言っていますが、中国人社会は地縁・血縁のネットワークが依然として重要で社会主義の今日でも基本的に変わりありません。たとえば、最近の中国では、何でも裏口からたのむなんて事が大きな社会的弊害になっているのですが、大いに近代化しなくてはいけないなどという事を言っていて、そういう事が平気で行なわれるのです。で「裏口」の事を読んで字の通り「後門」と書くわけですが、「走后門」といって裏口へかけ込んで行くという事です。まあ、これが依然として中国社会でしきりに行なわれているという事は、いかに中国人社会が地縁・血縁的なネットワークのコネ社会であるか。すべてにおいてそういう社会です。もっとも昔から役人達も、袴を着た時は儒教のいわば徳目を唱えて儀式をやるのですが、家へ帰れば道教の世界の中で自由放任を楽しんでいるわけです。こういう所が中国社会が激動をくり返しながら持ちこたえて来た大きな原因なのかもしれません。ところが毛沢東の政治とか文化大革命というのは、そういう隙間社会を全部押しつぶそうとしたのです。言ってみれば公的生活と私的生活の無差

別化、私生活の政治化という、これはとてもじゃないが長続きしないと思ったわけですが、そのいわばつけに今の中国はものすごく悩んでいます。

今でこそ「文化大革命は悲劇である」とか「二度と繰り返してはならない体験である」などと言っていますが、我々からすればそんな悲劇であったなら、なぜあの文革の時にレジスタンスは起こらなかったのかと疑問です。確かに抵抗運動はありましたけれども、一方では毛沢東が絶対だったわけで、結局、そういう状況の中で紅衛兵運動から始まってものすごい熱狂がかきたてられ、そして非常に政治技術に長けたカリスマ的指導者が全能になってしまった。その代償はやはり非常に大きいと思います。中国社会はズタズタに引き裂かれてしまったのですから。

しかし今、日本に来る人達は、若い人達、留学生達、或いは幹部達、私が接する人達は皆口々に文化大革命はひどかったとか、毛沢東はけしからんなどと言いますが、その反面、あの文化大革命を大いに称えた人達はどこへ行ってしまったのかという気がするわけです。やはり中国の中には、そういう人達も今依然として存在しているわけで、日本と接触する人や日中関係の前面に立っている人は、世が世ならば絶対に表に出て来れない人達がすべて表に出ているわけですから、その人達は文革の悲劇や、文革がいかに悪いかを言う事は当然なのです。最高指導者である鄧小平にしても胡耀邦にしても、全部ついでの間までは批判されていた。結局あの文化大革命の悲劇は、四人組逮捕という様な一種の宮廷クーデターによってしか、それを結着することができなかつたところに大きな問題の根が残っているのです。

。10年前の中国

そこで今度は10年戻っていただきたいのですが、10年前の中国はどうであったか!?! 10年前の1976年は中国現代史上の画期ともいえる年で、1月に周恩来が亡くなり、その周恩来の死を党中央が非常に冷たくあしらった事に反抗する民衆反乱、つまり天安門事件が4月に起こり、そして鄧小平は天安門事件の黒幕としてすべての責任をとらされて追放されたわけです。ですから10年前の今頃は鄧小平は行方不明でした。彼は、「資本主義の道を歩む実権派」であるとか「裏切り者」、「スパイ」、「労働者階級の敵」と言われていたのです。そしてその年、朱徳將軍というもう一人の紅軍の指導者が死んで段々不吉な予感が出てきた時に、あの唐山大地震が起こったわけです。

この時は毛沢東の死の直前にあり、そして毛沢東が亡くなったのが9月9日の重陽節で、その時私はNHKのテレビに引っ張り出されまして、若干手前味噌になって恐縮ですが「これは中国にとって、解き放たれた死であり大変な事が起こる」だろうと言った記憶があります。

ところが当時は一般のマスコミも「今、中国は毛主席の死を全中国民衆が悼み悲しんでいる。この悲しみを力に変えるために、一致団結して中国はまとまってゆくだろう」と言っていました。どうして私がそういう予感をしたかと言いますと、まず毛沢東葬儀の委員長が決まらなかったのです。これを中国では「追悼会主席」と言います。周恩来が亡くなった時は毛沢東が葬儀委員長になり、そして華国鋒が代行してこれを取りおこない、鄧小平が弔辞を読んだ。それでなんとか治まりましたが、毛沢東が亡

くなった時を見ていると追悼会主席が四名別格で列記されている。こんなバカな事はないことで、葬儀委員長さえ決めかねたのです。ですから中国を分析するにはなんにも特殊な情報とかはいらないわけで、人民日報を見れば分るわけです。

毛沢東の遺体はそっちのけで、毛沢東が息を引き取った日から次の権力闘争は始まっていたわけです。それで妥協的にその四人組の中から二人と、それから葉劍英、華国鋒という人物が葬儀委員長になったわけですが、その時中国では官庁街に半旗が上がったり上がらなかったりだという情報もはいつてきました。つまり、服喪期間をめぐっても一致ができず、結局妥協的に一ヶ月を服喪期間にするという事になり、10月8日までが服喪期間だったわけです。その間は一種の政治休戦であって、江青夫人はやはり喪主の立場ですから、自分の亭主でしかも民族の英雄が亡くなった時に一ヶ月位は大丈夫だと思っていたのでしょう。ところが、喪が明ける前日の朝、汪東興指揮下の中央警衛団の手によって一網打尽、いわば喪主もろとも逮捕されてしまったというのがたった10年前のドラマだったのです。

そういう状況の中で北京政変が起こります。言ってみれば毛沢東の本当の側近だった人達が内輪モメして片方が喪主の側を捕まえてしまった。そして華国鋒氏は10月7日に党、政、軍を一拳に握って最高指導者になり、街頭では華国鋒こそ英明な指導者だという銅鑼や太鼓のキャンペーンが始まっていましたが、その日に中央委員会の開かれた形跡は無いわけで、つまり一種のクーデターであったわけです。ですから、その日から華国鋒は自らの権力の正統性の根拠を疑われるわけで、いわばいかがわしい指導者であったわけです。何の手続きもせずにクーデターをやって自分が最高権力者の椅子に座ったにすぎないのですから…。

そういう状況がたかだか10年位前にあったわけで、ところが世の中の動きが早いものですから、すっかり中国は物分りが良くなって“近代化”だとみなが言っているのですが、やはり中国社会はこの激動の20年、あるいは10年の現実を依然として引きずっている社会だという事を我々は忘れてはならないと思います。

◦ 5年前の中国

さて、そこで今度は5年前に目を移してみてください。5年前はまだ華国鋒が天下を取っていた直後です。大平さんが亡くなって今年7周忌になりますけれど、大平さんの葬儀にも華国鋒氏が来ました。あの時、私は武道館で華国鋒氏の後姿を見てまして“この人は国へ帰ればやがて消えてゆく人だろう”と書いておりましたが、81年6月には華国鋒がひきつりおろされて鄧小平の部下の胡耀邦が党主席になった。華国鋒をようやく追放して、現在の鄧小平が権力を握り、鄧小平体制をほぼ全面的に固めたのが1982年9月の12回党大会です。ですから中国は近代化とか開放政策と言われるけれど、それから数えるとまだ4年もたっていないのです。この辺の所をやはり一方で押さえておかないと中国の政治・社会情勢の、表からは見えなけれど中に潜むドロドロした現実が理解できないのではないかという気がします。

◦ 現在の中国

それでは再び中国が文革のような激動の巷に落ち込むのかと言ったら、私は必ずし

もそうでないと思います。鄧小平が、もし身罷った場合、胡耀邦で大丈夫かというそういう不安はあります。つまり鄧小平・胡耀邦というラインは、いわば中国共産党の中でのエリート中のエリートで、しかも鄧小平の息のかかった人達が今ラインに立っているわけです。もう少し若い世代では胡啓立という人がいます。彼等は皆、共産主義青年団出身のいわば青年将校というか共産党の中ではエリートです。けれど一方では、そのエリート集団に対する反発もありますし、党人派みたいな人達もいるわけです。青年将校でない人もいるわけです。それらの人達が、もう一つのグループを陳雲さんを中心に形成しています。こういう、いずれも毛沢東時代にはやられていた人達の間で、やはり明らかな路線対立が今起こっています。

現在の中国の近代化をめぐる、こんな事やったら社会主義がダメになるのではないかという当然の正論があるわけです。この正論を代表するのが陳雲で、中国では最近、陳雲と鄧小平がいかにも仲がいいんだという笑顔で談笑している写真をしょつ中出していますが、そのようなこと事体が一種の逆説であるわけです。しかも鄧小平は色々な人を斬ってきて敵が多いのですが、対照的に陳雲は非常に人格円満で、大事な時にひとこと言う人です。たとえば「日本からあんなにプラント導入して外貨の準備はあるのか」という彼の一言で、プラント・キャンセルしてきたのは80年代の初頭ですし、最近では「万元戸なんてあんなもの褒めそやして新しい階級分立が起こってるじゃないか」と言っています。

去年の9月18日の中国共産党全国代表会議では最後は陳雲が締め括りの演説をやっています。そしてその演説は、真っこうから鄧小平のやっている事はけしからんと言わんばかりです。ですから、今もし無記名投票をやったらむしろ陳雲が党内で一番人望を得るのではないかと、票が集まるのではないかと私は見えています。

鄧小平の場合は、やはりそれだけの切れ者であるだけに敵も多いし、それから同じ系列の中にも「鄧小平には……」という人々がいるのです。まあ、陳雲という人は今政治局常務委員で、そういう点では鄧小平とは同じ力を持ち、年も同じですがその系列の人達がソ連の第一副首相のアルヒポフと親交を結んだり、ゴルバチョフに会いに行っていながら日本人にはほとんど会わないのです。

日本はこんなに中国と経済関係が密接なのだから、その経済の一番の最高の指導者とされている陳雲と、誰か会って来て欲しいと思うのですが彼は絶対に会わない。ソ連の人達が来ると非常に喜んで応接しているわけで、今度のゴルバチョフのウラジオストック声明を受けて最も生き生きしている人達はこれらの人達ですから、ポスト鄧小平にもやはり不安はあります。しかもこの2～3年、鄧小平のやっていることは、急ぎ過ぎ、やり過ぎでうまくいっていないのです。香港のすぐ近くに深圳という経済特別区があり、私もしばしば行くのですが、そこで最近経済特別区のモデル企業だと言われた三洋電機が裁判沙汰になって中国側とトラブルを起こしています。

今、日中貿易のトラブルだけで1千億円以上になっているでしょう。それは日本にも責任があって、一生懸命中国に物を売ろうとしても結局は中国に外貨が無いのです。今の中国は外貨準備は30億ぐらいだろうと思いますから、10億の人口を支えるにはお金がない。ちなみに経済は無政府的に、非人格的に動きますから主観を除いて言うと、中国の1/10の人口しかない台湾は、中国の10倍以上のUS \$ 370億ほどの外貨準備を持

ってお金が有り余っている。こういう差が一方では出て来てしまっている。今後、中国政治の流れは逆流はしないと思いますが、右へ左へとまだ蛇行するでしょう。これがいつまで続くかと言うと、私の仮説では1人あたりGNPがUS\$2000ぐらいになるまで続くだろうと思います。

それまで中国は、やはり不安定な政治的・社会的状況を繰り返していかざるをえないのです。大体、アジアのNICs諸国の1人あたりGNPがUS\$2000ぐらいになると、たとえば貯蓄率が非常に増えるとか、普通の市民が海外旅行ができるようになるとか、そういう社会的成熟が起こるのですが、中国に今そういう事が期待できるかと言ったらそうではないわけです。日本に来られる人々はエリート中のエリートです。21世紀の半ばにおそらく今の台湾ぐらいの経済水準になるかならないかというのが平均的な中国の近代化のビジョンだと思います。

たとえば、早い話が文盲率にしてもまだ30%文盲です。国民の25人に1人にあたる4000万人の党员を持つ中国共産党というエリート集団の中でも10人に1人は文盲であるという事を中国共産党も認めています。そういう状況を解消することでさえ、70~80年かかるのではないかということなのです。電話の普及率も、日本に比べて数十年遅れて、大体、今中国は千人に1台ぐらいの割合です。そういう意味では、近代化の中でもまだやる事はいくらでもあり、鉄道営業キロ数も日本に比べて70~80年遅れますから、そういう所まで中国はまだ過去のマイナス遺産の大きなツケを支払っていかなくては行けない。だから、これは言ってみれば、毛沢東政治のツケであるよりは明治維新以来の150年間の日中の比較経済社会発展の遅れの代償だと言っていると思います。

中国人とのつきあい方

◦ 同文同種か異母兄弟か

このような困難を抱えているだけに、中国社会というのはそう簡単に近代化するわけにはいかないのではないかと私は見るわけです。

そこで今日の本題に入るわけですが、日本人はとかく日中“同文同種”と言ったりして、中国を非常にわかりやすく理解している様についつい錯覚します。でも私はそこに一番問題があると思います。日中両民族はそもそも異母兄弟の関係ですから、あまり接近しすぎたり、その異母兄弟の間ではどちらがどちらに恩恵を与えるという関係は避けた方が良くはないか。どんな生物でもあまり近い者同士は、一定の生理的な空間をおかないと摩擦が生じたり、近親憎悪関係になります。そういう関係だという風につまり、冷めたある一定の距離をおいた異母兄弟なりのつきあい方をすべきだと我々はわりきった方がいいのではないかと思います。

中国からすると、今は本当に日本の技術や資金が欲しいから一生懸命に日本へ言い寄ってきますが、けれども成り上がった弟分からは恩を受けたくないという気持が潜在的にあります。我々は、40倍も豊かな国であるだけに、その意味でも禁欲した方が良くはないかという気がします。ですから、むしろ中国でうまく商売がやれるのだったら、日本はアメリカに恩を売ってアメリカに儲けていただいて、その分日

米貿易摩擦が解消すればいいのではないかと思いますし、アメリカの方が中国人とはうまくゆくのではないかという気がします。

それから“同文同種”というのも、またこれはおかしいのであって、やはり最近の文字にしても、みなさんおそらく中国へ行くと読めない文字が沢山出てきているのです。ちょっと実験として、これは私の本にはよく書く例ですから大変恐縮ですが、一番中国的な字を4つあげますからお答えいただきたい…最も中国的な字です……

儒教の「儒」は「亻」と書きます。こうしてしまうと、あまり同文同種だなどという親近感はなくなってしまいます。「儒」は「ルー」と発音しますが「入」という字も「ルー」なんです。「忖」は一心太助みたいですが、道徳の「徳」なんです。旧字の「徳」の一部をとっています。ちなみに中国では非常口の事を「太平門」と書きますから、ここでも日本字とずい分違います。緊急事態になっても天下泰平なのです。「宀」はウかんむりの下に人があるわけですから「家」です。これは大体おわかりになると思います。この程度ならまだ良くて、もう一つ「冫」—これは実は「九」(チョウ)の同音で酒っていう字なのです。これでは親の仇を打たされるようで「酒」の味もなくなってしまいます。

数千年来の間、文字体系が同じだったのは中国しかないのですが、最近中国はこれをローマ字化しようとしたのです。中国に昔からいる珍しい猿「金絲猴」の名前のついた“たばこ”なんてずーっとローマ字が沢山続いてしまい、私の様に中国語をやった者でもいったい何が書いてあるのか分らない。漢字を記号化してやがてローマ字化してゆく、それが毛沢東思想だったわけです。幸いな事に、最近中国ではあまりにもひどい略字化をストップしつつありますから、私はそれは非常に結構な事だと思いますが、こういう状況が一方で進んでいると言っていると思います。

日本人と中国人の違いというか、日中の漢字の統一なんていうのは大変アイデアとしては良いのですが、中国が略字化をやめてもとに戻すとするとどうやってこれを統一するか非常に難しい課題じゃないかと思えます。最近見てますと日中関係で意外にこういう根本的な事が知られていない。つい最近もこういう例がありました。一昨年になりますが、中国から三千人、日本の青年達を招いて大友好の交流があったのです。それは胡耀邦が日本へ来た時、NHKのテレビで勢い余って「未来は青年達の友好である」と招待したのです。私の所からも若い大学の講師が行きましたが、その事が中国で問題になってしまいました。つまり「中国は今貧しい。それなのに日本人三千人も呼んだのに来た日本の若者はまったく贖罪の意識を感じていないで戦争の反省が無い」と言っているわけです。

まあ、本当は呼んだ以上はあまりこんな事言わない方がいいのですが、やはり中国は教科書問題でも靖国問題でも常々そういう事を言うわけです。ですから私はその時に、日本の政府関係者にも進言したのですが「日本はこんなに豊かなんだから、やはり中国に全部all guaranteeで呼ばれるのはまずいのじゃないか」「行くのは結構だけれども、飛行機代だけは日本側が負担したらいいだろう。若者は今お金を持っているし中国民航機の団体で行けば十万円位ですから」と。ところがそれをやらなかったわけです。そうすると、その時はいいけれど後で色々中国側に不満が募ったりして「あんなに犠牲をはらって三千人呼んだのに意味が無かったじゃないか」と。それで実は去

年の後半から南京虐殺資料館などがあちこちにできたりしたのです。これはひとつには日本の若者を見て「戦争を忘れている。これはけしからん」と、過去の事を色々やっているわけです。やはり、もしも行くんだったら滞在費はいいけれども飛行機代は日本側が負担すべきであったし、さもなければ中国からも三千人の青年を呼ぶだけの予算措置を日本の政府が講ずるべきだった。そうして初めてこの招待を受け入れるべきだったのです。

当時は、中国も開放体制で鄧小平の近代化路線にリンクした、一種のブームでしたから、政府も私の意見を受け入れてくれなかったのですが、行った結果がそういう事になったわけです。ですから、もしも将来、胡耀邦が批判されるとしたらこの事は罪状の一つになるかもしれません。そして中国の人達とおつきあひする時には招いたら招き返さなくてはいけないのが鉄則なのに日本は三千人招いていないわけです。こんなに豊かな国の若い人達が三千人中国へ行って、その後三千人を招こうとしない。だから北京大学の学生達は、去年の9月18日に靖国問題でデモをやって、そのデモの中で「あの三千人は何だ!!」っていうのは当然かもしれません。

中国人とおつきあひする時には、必ずお客に行ったら招き返すという事を知らなくてはいけません。それを日中外交の中でやってないわけですからそれはやはりいけないのではないかと思います。もともと中国語には、お客を招く時に使う言葉に“請客”があり、お客に招かれたらちゃんと席を返さなくてはいけない“回請”あるいは“還席”という言葉があります。こういう極々単純な事が、日中関係でおろそかにされているわけです。

本当は胡耀邦がNHKのテレビで「未来は日中青年達のものだ。だから三千人招く!!」と言った時にすぐ応じなくていいのです。“三顧の礼”と言うように、三回招かれて初めて行けばいいのです。ところが日本人はすぐいい気になって行くものですから、その上招き返していないわけですから、中国の側は潜在的に腹の中で「何だ!!」っていう事になっているのです。そのかわり招かれたらちゃんと行かざるをえない。つまり昔から有名な言葉に「招きて来たらざるは礼無きなり、来たりて招かざるも礼無きなり」という言葉があります。こういう非常に単純な事が日中関係では意外に無視されている。それからこれは中曽根首相や外務省の高官には非常に申し訳ないかもしれませんが「自分達は家族ぐるみでつきあったからもう日中関係には問題が無い」「北京へ行った時に胡耀邦と家族ぐるみでつきあった」とおっしゃっていた。まあこれも中国人とのつきあひの場合は、心しなければいけないわけで中国人は家族ぐるみのつきあひを公人がやる事を「よし」としないのです。むしろそんな事をやるのは軽薄な人、つまり“小人”なのです。“君子の交わりは淡きこと水のごとし、小人の交わりは甘きこと醴（甘酒）のごとし”なのです。ですから、日本の総理大臣や大使は向こうへ行ったら君子の交わりをし、小人の交わりをやってはいけないのです。

そういう事があっちこっちありまして、どうも日中関係には文化の違いが意外に大きな問題になる様な気がします。

◦ 死生観の違い

そこでその様な例をもう2～3述べてみると、たとえば靖国問題の時に私も言いましたが、やはり死生観が違います。日本人は人間が死ねば仏になるわけで、死んだ人の事を悪く言わない。たいした政治家じゃないと思っても死亡記事を見るとすごく立派な風に書いてある。中国人はそんな事ありません。死んでも悪い者は暴きます。最近の例では、文化大革命の時に四人組の黒幕と言われた康生^{コウセイ}という人がいましたが、彼が亡くなった時には盛大な追悼会が開かれたのです。ところが最近、実は康生が一番悪かったと言われ彼が全面的に暴かれるわけです。

日本人の感覚ではそれはないでしょう。ですから東京裁判、A級戦犯を合祀しているなどの問題の背景にもそういう中国人の死生観があるのではないかと思います。ですからそれに対しては「日本人の死生観はこうだ」という事をはっきり言っていんだと思います。

◦ 法概念の違い

相互理解と言うけれども、一度は火花が散らないとダメなのであって、どうも日中関係にはそういう火花を散らせる前にお互いに遠慮して、腹の中で色々思ったり、感じたりしているからうまくゆかないという面があるのではないかと思います。それから最近、日中関係でかなり深刻なトラブルが起っています。私の教え子はみんな企業の第一線でやっていますけれど、冒頭で言いました通り商売はなかなかうまくいっていません。儲かっているところなんてほとんどありません。金融機関でも将来を見越してやっているわけですが、現実にはなかなかうまくいっていない。ですから私共は中国と商売やって儲かる為には、もっと中国経済の土台が底上げされる様な事をお手伝いする事が大切であって、それは50年、100年ぐらい先を見て手伝うような気持ちにならないといけないと思います。

そして中国の経済が活性化してくれば、日本にとってもある意味では商売をやっても儲かるような相手になるのですが、とにかく今みたいな状態でテレビが売れるからといってワーッと売ったものだから、たちどころに外貨が無くなってしまった。特に去年の4月1日付で“外貨管理違反実施処罰細則”という非常に厳しい通達が出てからは、なりふりかまわずもう契約なんて事を言ってられず、最近の商談の大部分は中国側から約束の破棄がされています。ある北海道の業者ですが、大連がこれから非常に可能性があるという事で、プレハブの住宅を作る設備投資をして一生懸命中国にプレハブの住宅を輸出しようとしていたら、中国からストップになって倒産してしまったというような例が本当に最近多いのです。

そういう時には、やはりさっき言った今の中国社会はわずか5年・10年あるいは20年、舞台を回わして見ると大変厳しい社会であって、そのつけがまだあるという事と同時に、いわば中国人の法概念や契約概念というものをよく理解しておく必要があると思います。もともと、中国では文人とかインテリは法にとらわれないのが“よし”とされているわけですから、我々みたいな近代法の土壌の中で育ってきたのとは大変違います。“天子法を犯して民と同罪”という言葉もありますが、天子は法を犯す事はむしろ当然なのです。民衆の方はいかに法網をくぐりぬけるか、つまり中国人にと

って法というものはそもそも刑罰なのです。日本では法というものはいわば“基本的人権”云云と言うように権利の保障なんですけれど、中国ではまさに刑責本意です。ですから中国では、法はできるだけ簡単な方がいい。どういう風にも解釈が可能になるわけで“一条鞭法”とか“法三章”とかみんな中国は法は簡略です。文革の時の毛沢東憲法はすごく簡略です。その方がどの様にでも運用できるわけで、そうすると今度は法の下で支配される側が、いかに読み変えて生きてゆくかという事が大事になってくる。今の中国の憲法のたてまえからすると国家主席は李先念さんです。ところが李先念という人は一昨年の建国35周年というまさに国家行事に挨拶もさせてもらえなかった。これは我々の感覚からしておかしいのに中国の感覚では必ずしもそうではないみたいです。

それから、契約という面でもそうなのですが、法というものについてもそういう気持ちがあるのであって、これを一番自然体で表わしているのが中国の道路交通事情です。あるいはここにもホンダの貢献するところがあるかもしれませんが、毛沢東思想の下でも北京や上海の街頭ではどうしてあんな簡単な信号を守るといふ事や歩道・車道の区別ができないのか。もう人がうようよ動き回り、いわば毛沢東思想によってあれほど国全体がコントロールされている時にもこの点だけはコントロールできなかった。これが中国人の基本的な法感覚の反映だと思います。ですから“駐車違反”なんて立札が書いてあっても、これはむしろ駐車していいという事なのです。“駐車違反の場合は厳罰を処す!!”と書いてあって初めて駐車しなくなる。

○ 日中歴史の決算

こういう様な所まで我々が理解していればもっと大らかに中国人との商売もできるのかもしれませんが。なかなかその辺の所まで理解できないから、ついついトラブルが起こる。トラブルが起こるとお互いに期待が大きいものですから、アメリカと日本の間のビジネスが悪くなったのとは、もっと違った色々のもつれが出て来ます。そして最後には中国人の側からは「なんだ日本人は!!俺達を侵略したじゃないか!!」という言葉が出てくるでしょう。

中国の人達が時に応じてそういう事を言うという事をしている限り、私は中国自身も本当の近代化をできないと思います。日本人が日中戦争で五百万あるいは一千万、中国人を犠牲にしたという事を正当化するつもりはありませんが、文革では二千万死んでいるわけですから、死者の命に軽重は無いとすればいったいその現実をどのように考えるかという事を問い詰めていった時に、単に日中戦争の事だけを時々持ち出していけば済むというものではないのではないのでしょうか。その辺は、一度歴史の決算をしなければいけないと私は思っています。そういう歴史の決算というものがどういう所でできるかと言うと、結局日本人と中国人が同文同種という事に甘えずに、自己の文化なり歴史や伝統に目ざめて、いわば本音をぶつけ合うという事の中でしかできないのではないかと思います。

私は時々言うのですが、中国へ行くと博物館とか人民大会堂とか万里の長城とか入場料を取られますが中国の人達と外国人と入場料が違うのです。日本人は大体3元取られ、中国の人達は5角とか6角、これは他の世界…ソ連だってそんな事はやってい

ません。これは困った事で、東京でもし外国人だけに上野の美術館や博物館の入場料を数倍も取ったらどういう事になるか？現在の中国の近代化っていうのは、そういうレベルの中で行なわれている限り本物にならない。ですからついつい人民元というものをそこまで数倍底上げして、ようやく円や\$とおつきあいをするという事になっている様な気がします。

中国と日本・その文化の違い

そこで最後に私が言いたいのは、どうも意外に中国人と日本人の間には色々文化的な一体感がありながらも、実はむしろ違いの方が多いのではないかという事です。

。日本の美・封建社会

なぜ中国には生花や茶道が生まれなかったのか。中国ではもともとお茶というのは喫茶の風習があり、陸羽なんてお茶の神様もいますけれども、お茶は昔から薬として飲んでいたので。ヤカンも我々知らずに使っていますが“薬罐子”^{ヤクカン}ですから、ヤカンは薬を煎じる器なんですね。ですから薬罐なのです。それで中国人の場合、お茶をヤカンに入れてぐつぐつ煮て話をしながらお茶を飲ませるんですけど、茶道に見られるような美意識や作法を中国人はついつい生み出せなかった。これは中国社会が、いつも陰陽の二元的な社会で、一元的な物、一回だけの出会いをものすごく大事にするという様な美意識は無い。“一期一会”という言葉は中国語には無いのです。

日本人はまさに“一期一会”とか懐石料理で箸は一回限りで使い捨てるとか、そういう所に日本的な美の我々が考える美意識があると思いますけれども、中国では箸でも何回も使いますしそういう違いが日中の文化の中にも色々な側面であるわけで、これは日本人の創造だと思います。もちろん我々は色々中国から文化的恩恵も受けたわけですが、それを実にうまく造り変えて変容してきている。それと実にselectiveに中国の文化を受け入れています。たとえば“宦官”“纏足”なんて風習は日本人の生理感覚からするととても受け入れられなかったんだろうと思います。

律令制度や漢字やそういうものは受け入れたけれども、日本人は宦官や纏足は拒否したわけです。また意外に知られていないのですが、長い間中国には封建社会が存在していないのです。我々が考えるような封建社会というものは、もう周の時代に紀元前に終わっていますから、諸侯が分封されて統治されるという形ではなく、いつも皇帝型の権力で皇帝が天下を全部所有していたのです。封建社会が無いから中国には武士はいませんでした。日本には長い間の武家政治の伝統がありますから、やはり武家文化の伝統が日本の美にかなり影響を与えていると思います。おそらく“生花”や“茶道”なんていうものもそういう所の影響があると思います。

最も根本的な日本的な“美”とか“芸術”とか“文化”とかを考えますと、なんとなく中国から来たように思われていますが、よくよく考えてみるとそこに大きな違いがある。その事を我々はもっと自覚し、同時に中国の人達はそういう日本というものをそれなりに見て行って欲しいと思います。

以上、今日のお話しがみなさんの中国理解の一助になれば大変幸いです。思う次第であります。どうもありがとうございました。

後記：胡耀邦前中国共産党総書記解任理由の1つとして、「集団指導の原則への違反」が挙げられており、1985年秋に日本人青年 3,000人を招待したことが「独断行動」であるとして批判されている事を、1月21日付の香港英字紙「ホンコン・スタンダード」が伝えており、本懇談会で予測された（8～9ページ参照）事態になっています。

本田財団レポート

No.1 「ディスカバリーズ国際シンポジウム ローマ1977」の報告 電気通信大学教授 合田周平	昭53.5	No.28 「錬金術 昔と今」 理化学研究所地球化学研究室 島 誠	昭57.4
No.2 異文化間のコミュニケーションの問題をめぐって 東京大学教授 公文俊平	昭53.6	No.29 「産業用ロボットに対する意見」 東京工業大学教授 森 政弘	昭57.7
No.3 生産の時代から交流の時代へ 東京大学教授 木村尚三郎	昭53.8	No.30 「腕に技能をもった人材育成」 労働省職業訓練局海外技術協力室長 木全ミツ	昭57.7
No.4 語り言葉としての日本語 劇団四季主宰 浅利慶太	昭53.10	No.31 「日本の研究開発」 総合研究開発機構(NIRA)理事長 下河辺 淳	昭57.10
No.5 コミュニケーション技術の未来 電気通信科学財団理事長 白根禮吉	昭54.3	No.32 「自由経済下での技術者の役割」 ケンブリッジ大学名誉教授 ジョン F. コールズ	昭57.12
No.6 「ディスカバリーズ国際シンポジウム バリ1978」の報告 電気通信大学教授 合田周平	昭54.4	No.33 「日本人と西洋人」 東京大学文学部教授 高階秀爾	昭58.1
No.7 科学は進歩するのかわるのか 東京大学助教授 村上陽一郎	昭54.4	No.34 「ディスカバリーズ国際シンポジウム コロンバスオハイオ1982」報告 電気通信大学教授 合田周平	昭58.2
No.8 ヨーロッパから見た日本 NHK解説委員室主幹 山室英男	昭54.5	No.35 「エネルギーと環境」 横浜国立大学環境科学研究センター教授 田川博章	昭58.4
No.9 最近の国際政治における問題について 京都大学教授 高坂正堯	昭54.6	No.36 「第3世代の建築」 榎菊竹清訓建築設計事務所主宰 菊竹清訓	昭58.7
No.10 分散型システムについて 東京大学教授 石井威望	昭54.9	No.37 「日本における技術教育の実態と計画」 東京工業大学名誉教授 齋藤進六	昭58.8
No.11 「ディスカバリーズ国際シンポジウム ストックホルム1979」の報告 電気通信大学教授 合田周平	昭54.11	No.38 「大規模時代の終り—産業社会の地殻変動」 専修大学経済学部教授 中村秀一郎	昭58.8
No.12 公共政策形成の問題点 埼玉大学教授 吉村 融	昭55.1	No.39 「ディスカバリーズ国際シンポジウム ロンドン1983」の報告 電気通信大学教授 合田周平	昭58.9
No.13 医学と工学の対話 東京大学教授 澤美和彦	昭55.1	No.40 日本人と木の文化 千葉大学名誉教授・千葉工業大学教授 小原二郎	昭58.10
No.14 心の問題と工学 東京工業大学教授 寺野寿郎	昭55.2	No.41 「人間と自然との新しい対話」 ブラッセル自由大学教授 イリヤ・プリゴジン	昭59.2
No.15 最近の国際情勢から NHK解説委員室主幹 山室英男	昭55.4	No.42 「変化する日本社会」 大阪大学教授 山崎正和	昭59.3
No.16 コミュニケーション技術とその技術の進歩 MIT教授 イシエル デ ソラ プール	昭55.5	No.43 ベルギー「フランドル行政府産業使節団」講演会	昭59.7
No.17 寿命 東京大学教授 古川俊之	昭55.5	No.44 「新しい情報秩序を求めて」 電気通信大学助教授 小菅敏夫	昭59.7
No.18 日本に対する肯定と否定 東京大学教授 辻村 明	昭55.7	No.45 「アラブの行動原理」 国立民族学博物館教授 片倉もところ	昭59.10
No.19 自動車事故回避のノウハウ 成蹊大学教授 江守一郎	昭55.10	No.46 「21世紀のエネルギーを考える」 イタリア国立エネルギー研究機関総裁 ウンベルト・コロンボ	昭60.1
No.20 '80年代—国際経済の課題 日本短波放送専務取締役 小島章伸	昭55.11	No.47 「光のデザイン」 石井デザイン事務所 石井幹子	昭60.7
No.21 技術と文化 I V A 事務総長 グナー・ハンベリユース	昭55.12	No.48 「21世紀技術社会の展望」 第43回日経ハイテクセミナー	昭61.1
No.22 明治におけるエコ・テクノロジー 山本書店主 山本七平	昭56.5	No.49 「星をつぶす法」 文部省宇宙科学研究所所長 小田 稔	昭61.5
No.23 西ドイツから見た日本 電気通信大学教授 西尾幹二	昭56.6	No.50 「ひまわりVA太陽光は人間の生活にどう役立つか」 慶応義塾大学教授 森 敬	昭61.5
No.24 中国の現状と将来 東京外国語大学教授 中嶋嶺雄	昭56.9	No.51 「エコ・テクノロジーの宇宙的観察」 コーネル大学天文学および宇宙科学教授 カール・セーガン	昭62.2
No.25 アメリカから見た日本及び日本式ビジネス オハイオ州立大学教授 ブラッドレイ・リチャードソン	昭56.10	No.52 「人間はどこまで機械か」 東京大学教授 古川俊之	昭62.2
No.26 人々のニーズに効果的に応える技術 GE研究開発センターコンサルタント ハロルド チェスナット	昭57.1	No.53 「中国人とどのようにおつきあひすべきか」 東京外国語大学教授 中嶋嶺雄	昭62.2
No.27 ライフサイエンス ㈱三菱化成生命科学研究所人間自然研究部長 中村桂子	昭57.3		